

中国西北におけるイスラーム復興と女子教育 —臨夏中阿女学と韋州中阿女学を例として—

松本ますみ

はじめに

今日、国際社会において、途上国における女性の貧困は、各地域における男女間の不均衡な資本分配と固定化された性役割によるものであるというコンセンサスが得られつつある。男女の真の平等を実現するために、女性の教育がとりわけ重要であることは、1995年の第4回世界女性会議で採択された北京宣言及び行動綱領において明記され、2000年6月のニューヨークにおける国連特別総会「女性2000年会議」においても再確認されている。そのアドホック全体会合に関する報告書（2000年9月公表）の「北京宣言及び行動綱領実施のための更なる行動とイニシアティブ」（いわゆる成果文書）は、途上国女性のエンパワーメントのため、国内・国際レベルで取るべき行動として次のように述べている。「先住民女性の完全で自主的な参加を得て、これら女性の歴史、文化、精神、言語、志を尊重する教育・訓練計画を作成・実施するとともに、先住民女性が高等教育を含むあらゆるレベルのフォーマル、ノンフォーマル教育を受けられるようにする⁽¹⁾」。

中国で公式には「回族」と呼ばれる中国ムスリムは、厳格な意味ではこの「成果文書」の中に述べられた先住民にはあたらない。というのも、彼らは唐代以降、東西交渉の担い手として中東から海路中国にやってきたもの、あるいは元代に中央アジアから中国に陸路移民してきたものの子孫といわれるからである。しかし、以下に挙げる四点で、回族も上記「成果文書」が指し示す広義の「先住民」にあたりと考える。それは、第一にその少数性である。彼らの居住地は中国全土に散らばり、抗日戦争期に中国共産党によって「少数民族」の認定を受けて今日に至っている。1990年の調査で人口約860万人。人口が12億人以上、人口の90%以上が漢族である中国の中で、彼らは総人口の0.71%を占めるにすぎない。第二にその歴史である。彼らは清朝時代に度重なる弾圧・殲滅を受け存亡の危機に立たされ、人民共和国成立以降も57年の反右派闘争から文化大革命終息までの約20年間、アイデンティティの根幹をなすイスラームの宗教生活を正常に送ることができなかったという歴史を背負っている。

第三に、独自の文化と言語である。千年以上中国に住みつづけていることで日常会話は漢語とはなっているが、宗教言語のアラビア語やペルシャ語を非常に尊重している。第四に、その貧困である。

本論では、1979年の改革開放以後、中国西北で行われているムスリム女性のための教育について以下の点に留意して論ずる。まず、第一に、イスラーム女子教育がどのような目的で行われ、どのような役割を果たしているのか、その歴史的・思想的背景、中国国民統合の観点、さらには女性のエンパワーメントの視点から考察する。第二に、中国の後発地域における女性のためのイスラーム宗教教育（ノンフォーマル教育）と国家主導による教育（フォーマル教育）政策の間の一致点と矛盾点をさぐり、今後の問題を指摘したい。事例として、「中国のメッカ」と称される甘肅省臨夏市における臨夏中阿女校（「中」は中文：中国語、「阿」は阿文：アラビア語の略）におけるイスラーム女子教育と、寧夏回族自治区中部の小鎮、同心県韋州鎮におけるイスラーム女子教育を挙げる。

前者は、イスラーム女子教育のいわゆるエリート校である。比較的経済的に恵まれ、また信仰心篤い家庭に育った生徒を全国から集め、整備された設備と優秀な教師陣を擁している。生徒のほとんどは修了後教師の道を選び、中には中東諸国に留学するものもいる。中央政府や地方政府の経済的援助は全く受けず、またカリキュラムもアラビア語学習を中心とした独自のものであるが、国家教育部の認可も受けている。これを本論では「イスラーム精鋭女子教育」と呼ぶことにする。

後者は、草の根のイスラーム女子教育校である。中国正史という歴史の表舞台には決して登場しなかった人口2万人余り、黄土沙漠の真ん中のオアシス、赤茶けた土壁に囲まれた韋州鎮は中国でも指折りの経済後発地帯に位置する。そこにおいて現在行われているノンフォーマルなイスラーム女子教育は、地方政府が推進するフォーマル教育が担いきれない部分を確実にカバーしているといっても過言ではない。このような後発地帯のイスラーム女子教育を本論では、「イスラーム基層女子教育」と呼ぶことにする⁽²⁾。

中国イスラーム女子教育の全体像は、まだ研究が緒についたばかりということもあってまだ明らかとはなっていない。また、これら教育を可能にしている中国イスラーム復興の実態もまったく明らかにされていない。筆者は昨年（1999年8月）、と今年（2000年9月）の二度にわたって日本人研究者としては初めて韋州鎮の中阿女校と臨夏女中阿学校を訪問することができた。この訪問は、寧夏社会科学院回族伊斯蘭教研究所

所長の馬平氏、助研究員魯忠慧氏の協力で実現できたものである。これら調査結果を踏まえ、本論は従来の中国教育研究の欠落部分を補わんとするものである。しかし、筆者はジェンダー論や教育学の専門家ではない。諸兄諸姉のご指正を請うものである。

1. これまでの研究

中国イスラーム女子教育について、中国では断片的な研究が『回族研究』等の雑誌で発表されてきたが、その全体像を把握する努力はまだ緒についたばかりである。その理由の第一に、中国イスラームの研究者が男性であるケースがほとんどであって、イスラーム女子教育が長らく男性研究者の興味の範疇外にあったことが挙げられる。中国におけるイスラーム研究の中心で、学術雑誌『回族研究』も編集・発行している寧夏社会科学院回族伊斯蘭研究所の研究員の90%以上が回族の男性である。

第二に、中国イスラーム研究自体が活発化したのが79年の改革開放以降で、まだ20年の歴史しかないことが挙げられる。反右派闘争から文化大革命の間、20年にも涉って省みられることがなかった少数民族・宗教研究の遅れを取り戻す努力が現在急ピッチで払われている。しかし、基礎的な研究すらもまだ発展途上にあり、イスラーム女子教育という「周縁」分野に対して充分な関心が払われてきたとは言いがたい。欧米の研究者の手によって90年代に入って数冊の中国イスラームに関する専著が出版されてきたが、このイスラーム女子教育問題に真っ向から手を染める研究はごく最近まで皆無であった⁽³⁾。

第三に、イスラーム女子教育を行う女子学校（中阿女学、中阿女校）の設立が再開されるようになってまだ歴史が浅いという事実である。家父長制が色濃く残る中国西北農村のイスラーム社会において、イスラーム女子学校設立の責任者は郷老と呼ばれる地域実力者である。民国時代（1912-1949）にはいくつかのイスラーム女子学校が公的、私的な支援のもとに中国各地に設立されていた。しかし、抗日戦争、国共内戦、そして新中国建国からまもなく始まった混乱の中で、その多くが閉鎖された。設立が再開されるようになったのは80年代に入ってからである。

第四に、教育学研究の照準がフォーマル教育にあてられていたことが挙げられる。この10年間、中国でも女子教育、特に西部後発地区の女子教育については、さかんな論議がされてきた。それはこの間に、女性に関する国際会議がいくつも開かれ、教育は女性を取り巻く環境を変えるために最も有効な手段であるというコンセンサスが広まったのも一因で

ある。しかし、研究者が政府機関勤務者、あるいは教員養成大学の教員であるケースがほとんどであることから、その研究目的はつきつめていけば、いかにフォーマル教育を拡充した上で女性の識字率を上昇させるかという側面に集中していた。そこには、ノンフォーマル教育の有効性という観点は全く欠けている。

従来の研究の欠落部分を一気にカバーしたと思われる大著が今年(2000年) 発刊された。それが、Maria Jasheck, Shui Jingjun (水鏡君), *The History of Women's Mosques in Modern China*, Curson, 2000である。この著作は中国ムスリム女性教育と宗教社会学についての詳細な歴史を著述し、秀逸な内容を誇っているが、そのフィールドは中原の河南省鄭州市を中心にする地域に限っている。そのため、中国西北の寧夏・甘肅に河南の事実を応用し、一般的真理を導き出すことは難しい。なぜならば、河南が位置する中原において回族は圧倒的少数派で、漢族という大海に浮かぶ小島のような共同体に寄り添うように生きてきたからである。また、鄭州のような大都市では従来、教育に対する意識が比較的高い。女性のための礼拝殿、清真女寺と女性阿訇(宗教指導者)すらも清代から存在する。

一方、中国西部、甘肅省臨夏州では回族人口が87万人、全人口の53%パーセントをしめ、清真寺(モスク)は1985年に1715座存在する⁽⁴⁾。州の中の行政区画で、人口15万人あまりの臨夏市では回族人口は45.9%、漢族が51.5%(1985年)、臨夏八坊といわれるムスリム聚居地区が明代以来形成され、「中国の小メッカ」とも呼ばれるイスラーム信仰篤い土地柄である⁽⁵⁾。かつて「河州」と呼ばれたこの地域のムスリムの政治力と経済力は清末以来民国期、人民共和国期を通して、端倪すべからざるものがあつた⁽⁶⁾。

他方、おなじく西部に位置する寧夏回族自治区は、その名称が示すとおり、回族が聚居している地域として1958年に成立した。1997年の統計で自治区全体では回族は33.98%の人口割合を占めるに過ぎないが、本論で取り上げる自治区中部の韋州ではその人口比率は75%にも跳ね上がる。ここでは明代以降、ムスリムこそが多数派の地域社会を形成してきた。それゆえ、同じ中国の回アイデンティティと一口でいっても、河南の都市部と甘肅省臨夏市、さらには寧夏の農村では濃淡の差があるであろうことは想像に難くない。ましてや、ジェンダーの観点からみた女性の役割も全く異なっている。さらに、経済水準の違いも大きい。とくに韋州は後発地域に存在し、1995年の抽出調査によると一家の年収が平均

で7619元（約9万9千円）である⁽⁷⁾が、一家あたり平均6.71人なので、一人あたりの年収は約1000元あまりとなる。この収入は1996年の一人あたり年収全国平均4838.9元の4分の1以下である。

2. 中国イスラーム復興と「先進」郷老の役割

回族は1990年の人口調査によれば約860万人である。「大拡散小聚居」といわれるように文字通り全国に散らばるイスラーム共同体のそれぞれの責任者は、郷老といわれる地元実力者である。彼は共同体の核となる清真寺の宗教指導者阿訇^{アホン}を招聘し、寺産といわれる寄付^{ワクフ}や天課^{ザカート}を集めて貧困者にも資本の再分配を促し、また、地域の宗教復興に留意するという任務を負っている。また、多数民族の漢族との折り合いや、地方政府、共産党支部との折衝も彼の役割である。郷老は共同体によって一人の場合も複数の場合もある。

民国時代に「先進」阿訇とムスリム知識人たちがいわゆるイスラーム新文化運動を起こし、漢族社会との共存、固陋を廃して西欧流の知識を習得すること、そしてアラビア語に基づくコーラン教育を提唱し、中国のイスラーム共同体の強化を図った。1930年代、40年代初頭にこの流れは確実に辺境のムスリム聚居地帯にも広がり、地域の郷老たちもそれらの流れに同調した。しかし、抗日戦争、国共内戦を経て、中華人民共和国の建国もつかのま、反右派闘争以来文革終結までの約20年間、宗教復興はタブーであった。宗教復興を公然と行うことができるようになったのは改革開放以後、1980年代になってからである。沈黙を強いられてきた「先進」郷老たちは、民国時代以来約40年ぶりにイスラーム復興、イスラーム復興を掲げ、同時に近代的知識と正確なアラビア語知識に基づくイスラームの真髓を伝えることができる優秀な阿訇^{アホン}を地域の清真寺に招いてきた。もちろん、経済的に比較的豊かな臨夏と、後発地帯に位置する韋州では、それぞれの郷老には異なる艱難があることは間違いない。しかし、彼らが共通して手を染めたのが、教育事業である。次に、彼らが中心となって始めた女子教育事業について述べよう。

3. 「イスラーム精鋭女子教育」の実際 —— 臨夏市中阿女校とイスラーム復興

「イスラーム精鋭女子教育」機関として、典型的な例⁽⁸⁾として挙げられるのが臨夏市中阿女校である。この寄宿制学校は、1989年8月に正式に創設されたが、その沿革は改革開放政策発動直後の1980年2月に遡る。

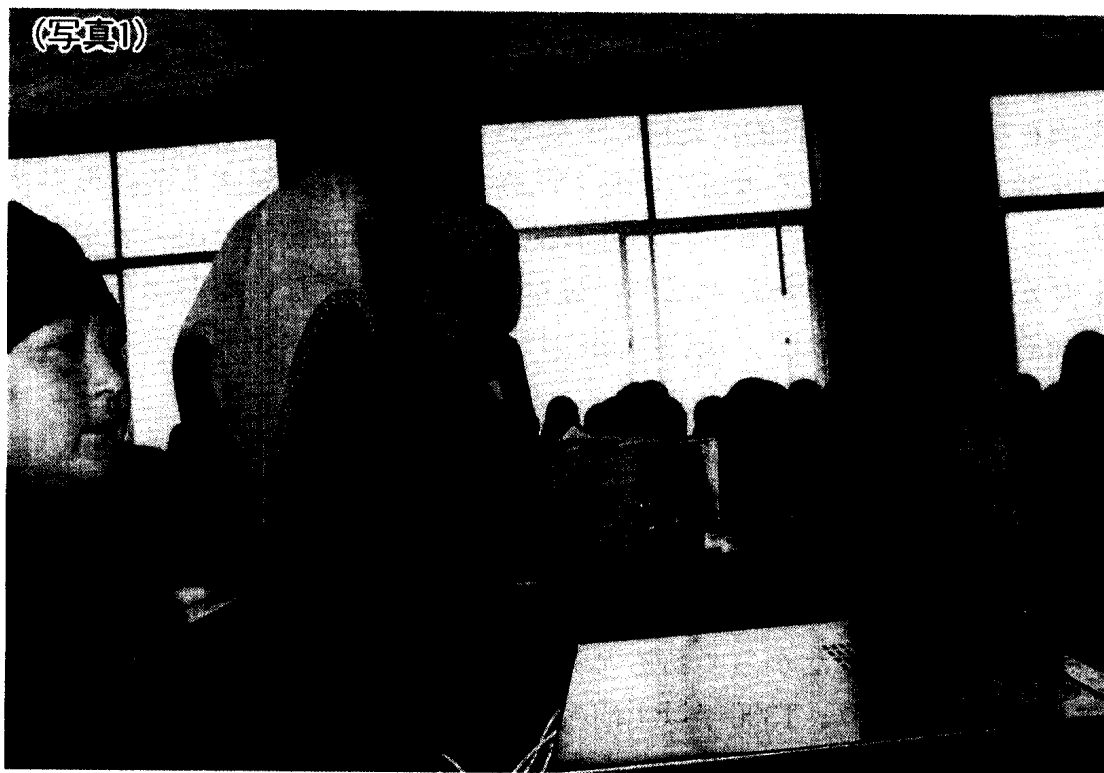
幼時からアラビア語を学んだ馬志信（男性）という臨夏市のムスリムが、各方面から資金を集め、ムスリム家庭の家屋一戸を借りて一種の成人学級である臨夏中阿业余学習班を近所の子供や成人を集めて始めた。これは全国で最初の私立中阿学校であった。その目的は、文革で荒廃した宗教心とイスラーム知識を取り戻し、イスラーム復興を遂げることに、さらには臨夏からかつてアラブ地域に移住した眷属と交流・交易を行って地域の経済発展を遂げることでイスラームを発展させるということにあった⁽⁹⁾。開設当時、女子班の生徒はわずか5名であった⁽¹⁰⁾。評判を聴きつけて、全国から生徒が集まり始め、1986年にはサウジアラビアの眷属や生徒の保護者から献金12万元を集めて臨夏市の西の郊外に新校舎を建設、臨夏中阿学校（男子校と女子校があり、場所は別々）が開学した⁽¹¹⁾。1989年8月には、国務院が公布した「社会力量辯学条例」にのっとった職業高等学校（日本では職業専門学校にあたる）として国家教育部の認可を受けた。初中学校（日本では中学校）卒業後のムスリム少女たち、さらには既婚女性すらもが地元臨夏市や甘肅省各地はもとより、寧夏、青海、雲南、新疆、海南、山西、東北、四川、内蒙古、湖北、河南、河北など全国各地から集まり、今まで15期計700名以上の卒業生を輩出している。また、1996年には160万元の献金を集め、1997年に敷地面積2600平方メートル、6階建ての校舎が完成した⁽¹²⁾。現在、中国各地出身の330名の女生徒が勉強している。

教育目標として、「民族教育を発展させ、民族的素質を向上し、多くのムスリム青年に社会建設と国家建設に貢献させること」を掲げ、さらには、「学校中退や失業中の青年に学校に戻る機会を与え、国家建設と民族振興に貢献しようという意志と専門技能をもった人材を育成すること」も謳っている。「民族教育」や「民族的素質向上」の内実は、コーランの内容を中心とした学習の宗教教育により「よきムスリマ（ムスリムの女性型）」となるべく人間修養を積み、社会に貢献できる人間になることに尽きる。だからこそ、目標とされる女性像は「知識、理想、自尊、自愛、自信をもつ、自立した新しい形のムスリマ」⁽¹³⁾ということになる。

四年制であるが、二年間勉強した後の優秀者のみが、次の段階に進級することができる。学費は每学期（半年）150元（その他50元の敷金あり）、食費300元、制服費が50元⁽¹⁴⁾。これは、中流家庭でなければ拠出が難しい金額といえ、実際、インタビューした19歳の生徒の祖父は寧夏銀川でも有数の企業経営者であった⁽¹⁵⁾。制服は、盖頭あるいは面沙とい

われるヴェールに、手首・くるぶしまで隠れるワンピースである。

カリキュラムは文化課（いわゆる教養）と専門に分かれている。前者は、漢語、歴史、英語、政治、数学などを学び、後者は、アラビア語精読、速読、文法、会話、視聴覚教育、新聞、翻訳、読解、作文、その他、コンピュータ、裁縫、武術などのクラスもある。年間36週を18週づつの2つの学期に分け、1週全34コマ（1コマ50分間）のクラスのうち、1学年はアラビア語関係が25コマと73%を占め、2学年は29コマ、85%と最大となる。3学年は26コマ、76%、4学年は20コマ、59%に減っている。これは、高学年にコンピュータや英語、政治学といった現代社会に要求される科目が導入されることによる⁽¹⁶⁾(写真1)。



育成する人材は三通りに分類される。第一に教育者、第二に宗教指導者（女阿訇^{アホン}）、第三に、中国・アラブ間の通商従事者である。今まで、卒業生で海外留学したものは17名、目的地はパキスタンが12名で最も多く、その他マレーシア4名、イエメンとアラブ首長国連邦が1人ずつである。まだ留学中のものも多いが、帰国後教師になったり、北京イスラーム経学院や北京外国語大学などで研鑽を積むものもいる。それら少数のものはそのイスラーム学の深い造詣により、女阿訇^{アホン}となることが求められている。

しかし、圧倒的多数は教師になる。四年の就学期間を終えた全卒業生266名のうち、所在が分かっているものは197名、その内、165名、84%

が、「イスラーム基層女子学校」というノンフォーマル教育の場でアラビア語を教えている⁽¹⁷⁾。その意味では、臨夏中阿女校のような「イスラーム女子精鋭学校」は、ノンフォーマル学校の教員養成を行う師範学校としての役割を多く期待されているといえる。それは、彼女たちが学んだイスラーム知識、アラビア語知識と現代知識が後発地域における数多くのイスラーム共同体のイスラーム復興と識字教育に有用であるとみなされているからである。

彼女たちは、ノンフォーマル学校を創設した各イスラーム共同体の郷老に招聘され「分配されて」農村に赴き、教師になる。彼女たちは自らの意志で「イスラームの真髄を伝える」、「イスラーム社会の発展に貢献する」、「イスラーム女性の権利を擁護し、女子教育に貢献し、貧困を解消し、自助発展能力を向上させる」ことによって地域のイスラーム復興を果たすことを目的に農村に下りる。彼女たちのこの行動は「フォーマル教育」を推進する政府の方針とまかり間違えば抵触する危険性がある。しかし、農村のフォーマル教育機関に一般の師範学校出身者が赴任したがる現状からみれば⁽¹⁸⁾、彼女たちのゆるぎない信仰から発した使命感は強い。それは、現代中国におけるイスラーム復興が次のような論理に基づいているからである。

中国「先進」ムスリムは、近現代中国におけるイスラームの不振、貧困、女性の高い非識字率と低い地位は、中国ムスリム社会が本来のあるべきイスラームの精神を忘れたからであると考え。特に、女性の高い非識字率と低い地位とに関しては、漢族の「男尊女卑」の家父長制から悪しき影響を受けたからであると考え。従って、コーランに厳格に準拠した生活を送り、1300年以上前のムハンマドの啓示時代にあったような「真実の」イスラーム共同体を取り戻せば、イスラームは復興し、貧困は解消され、コーランにあらわれた真の男女平等が達成されることが考えられる。しかし、ムハンマドの啓示時代がどのようなようであったかは普通人には分からない。よって、コーランの内容をよく解釈できるようにアラビア語に習熟し、イスラームの本質を理解できる人間を育成し、現代社会に合致するようにたゆまなくイスラームを改良すること、これこそがイスラーム復興であると「先進」ムスリムは考える。

しかし、中国では圧倒的多数を漢族が占め、イスラームの本来の姿である政教一致を実現する状況はない。だからこそ、清代の被弾圧や文革時代の悲劇を教訓とし、漢族社会との軋轢・衝突は避けて、他のエスニック集団とも共存共栄を図らなければならない。ナショナリズムと社会主

義の道を国是とする現在の中国国家が少数民族や宗教団体に求める必要最低条件は「愛国主義」と「中国共産党の指導」である。よって、分離主義を助長したり、党批判を公然とするようなイスラーム解釈を厳しく戒めていさえすえば、「先進」ムスリムである郷老や阿訇^{アホン}はイスラーム復興のイニシアティブを全面的にとることができる。

さて、次に挙げるのが、臨夏中阿女校卒業生たちの派遣先である典型的学イスラーム共同体の一つである寧夏回族自治区同心県韋州鎮の「イスラーム基層女子教育」機関の例である。

4. 「イスラーム基層女子教育」—— 韋州鎮のイスラーム復興の一形態 (1) 概観

寧夏回族自治区同心県韋州鎮は、自治区首府銀川から160キロ、車で片道約5時間、黄土高原のただ中、土壁に囲まれた人口22,196人の行政地域である。その内、回族は16,823人となっており、全体の75.79%を占める。1001平米キロと広大な面積で、人口密度は1平方キロあたり22人である⁽¹⁹⁾。収入のほとんどを農業収入にたよっている。経済面では特産品（羊毛、甘草、発菜——中華料理の材料。ゴビに自生する）や生活必需品（野菜、果物、穀物、家畜、宗教用品）などが市場で大いに流通しているが、奢侈品——例えばカメラのフィルムなど——を販売する商店は皆無であった。

さらに、教育面を見てみよう。韋州鎮だけの統計はないが、同心県全体をみると、1990年の調査で、総人口274,170人のうち、12歳以上の非識字、半非識字率は44.57%、うち回族は49.29%である。とりわけ、回族の女性は、12歳以上で63.63%が非識字、半非識字であり、男性のそれが26.16%であるのに比してとりわけ高い⁽²⁰⁾。全国平均の男性の非識字率が12.98%、女性非識字率が31.93%であるから、女性に関していえば、全国平均を31.70%も上回る数値である。韋州鎮における非識字率もほぼこれに沿っていると考えるのが妥当であろう。この高い非識字率に関しては後述する。

寧夏回族自治区全体では1997年の人口調査で530万人。うち、回族が33.98%の179.7万人を占める⁽²¹⁾。清真寺は区全体で2,584座あるが、それらのうち81.5%の2,106が自治区中南部の靈武県、呉忠市、同心県、海原県、固原県、西吉県、涇源県に集中して存在する⁽²²⁾。寧夏をはじめとした西北では一般的に清真寺に女性のための特別な礼拝所は設置されておらず、また女性のための清真寺（女寺）もない。従って、敬虔なム

スリム女性は一般に自宅で一日五回の礼拝を行う。

一般的に中国で回族といっても、沿海部の都市にすむ回族は漢化が進み、日常においてほとんど礼拝に参加しないものが大多数である。ただ豚肉を食さないという食習慣と、中国共産党の民族優遇政策によってのみ回アイデンティティを保っているものも多い⁽²³⁾。寧夏でも90万の人口を擁する自治区首都銀川に48座の清真寺があるが、最大規模の金曜礼拝ですら、おおむね男性の老人ばかり目立ち、若者の姿はほとんど見かけない。

しかし、寧夏中南部の農村に一步足を踏み入れれば様相は一変する。同心県全体で人口314,991人（1995年）に対し、清真寺は全部で403座。どこの清真寺においても一日に五回の礼拝が熱心に行われている。もちろん、参加者は敬虔な老若男性ムスリムである。ジェンダーの観点からすれば、寧夏の清真寺は全て男性によって独占的に運営され、参加されているということになる。阿訇^{アホン}もモッラー（宗教教理を学ぶ学生、“満拉”）、郷老も男性である。もちろん、地域社会において経済的生産活動は女性によっても支えられ、その労働によって得られた収入の一部が天課^{ザカート}として清真寺に収められ、社会に再分配されている。すなわち、彼女たちのイスラーム信仰の中心地となるべき現存の清真寺は現実には彼女たちの舅、夫、息子たちのためにだけ礼拝活動を行っており、彼女たちはその宗教心の発露である天課^{ザカート}に見合う恩恵を現存の清真寺から直接受けてはいないという解釈もできる。

しかし、これはうわべだけの解釈であって、本論で述べる草の根のイスラーム女子学校（女校）こそが女清真寺の代替としての役割を担っている。また、女校の女教師が阿訇^{アホン}資格をもっているケースが多い。

ちなみに、天課^{ザカート}の比率は収入や地域によってばらつきがあり一律ではないが、大体収入の2.5%が相場であるといわれている⁽²⁴⁾。ちなみに、中国のどの清真寺においても天課^{ザカート}を納めた当該地区の教民（ムスリム）の名前と金額は男女を問わず清真寺の掲示板に大きく張り出されている。多く天課^{ザカート}を納めたものほど共同体の構成員の尊敬を集めることは言うまでもない。

（2）韋州のイスラーム教派

韋州鎮も臨夏と同じように「小メッカ」とも称され、イスラーム信仰心篤い地方として知られる。その主要教派はイフワーン派と呼ばれる。19世紀末、馬萬福という阿訇^{アホン}によって中東から中国にもたらされた一種

の原理主義イフワーン派を公定イスラーム教義として寧夏に広めたのは、回民軍閥と呼ばれ、1920年代末から40年代に寧夏一帯を支配した馬鴻逵であった。この時代、イスラーム勢力の分裂は日本の侵略的分断政策に与するだけであるという認識が阿訇・知識人や政治的指導者の間に広がった。それゆえ、馬鴻逵は「コーランに基づいた生活の遵守」と、中国を祖国と考える「愛国主義」を謳った一種の原理主義であるイフワーン派を支配領域内に広め、教義をイフワーン派に収斂・吸収させるイスラーム一元化政策を推進した。当時「愛国は信仰の一部分 *hubb al-waṭan min al-īmān*」という中近東で19世紀以来さかんに唱えられたハディースの一句がイフワーンのみならず中国イスラーム界全体に広がっていた⁽²⁵⁾。教義の解釈をめぐる地域のカリフ同士が争い、時に流血騒ぎとなるというような殺伐とした状況を、愛国主義に基づいたイスラーム一元化政策によって收拾し、地域統合を完遂し、自らに地域権力を集中させることができると馬鴻逵は考えた。さらには、今回の聞き取り調査で韋州の郷老たちが強調したのは、なによりも、イフワーン派がコーランの教えを遵守し、日本軍という侵略者を追い払うという「理にかなう」内容を説いたものであったから受容されたということである。

日本軍は敗れ、国共内戦の結果、馬鴻逵も国民党とともに台湾に逃れたが、イフワーン派は寧夏に根強く残った。コーランにのっとりた厳格な生活、女性の蓋頭などはその表れである。さらに、抗日戦争後も中国イスラーム界では愛国主義の側面が大きく強調された。これにより、中国穆斯林全体が中華人民共和国という「祖国」の中で、少数民族「回族」として一定の政治的、社会的地位を占めることに成功した⁽²⁶⁾。しかし、反右派闘争から文革終息までの急速な社会主義化の波の中で約20年間の宗教と少数民族の受難の時代が続いた。

(3) 近代における韋州の女子教育の歴史

韋州において、穆斯林女性のための教育が始まったのは、馬鴻逵支配下の1931年のことである。イスラーム新文化運動の波が寧夏の小鎮韋州にも及んだ結果、この年、韋州の郷老が中心となって韋州清真大寺に「韋州中阿女子師範学校」を設立し、教員3名で漢語、算数、コーラン、教義、イスラーム法を教え、100名近い生徒を集めた⁽²⁷⁾。1939年に、当時の寧夏省予算で初めて「同心県韋州設立両学女子初小」が設立され、生徒は40名であった⁽²⁸⁾。その教育は、イスラーム教育と近代教育の二つの特徴を兼ね備えたものであった。しかし、この時点でも、女子就学率

は数パーセントに留まっていた。

人民共和国成立後、50年代に地方政府は男女共学の公立小学を作るが、女子の就学率は上昇しなかった。文革終息後、民族区域自治法（1984年制定）の第37条に則り、1985年に公立韋州女子小学や海如女子中学といった寄宿制女子校を作り、女子児童・生徒の募集に努め、ある程度の成果をおさめることができた。93年には95.5%の女子児童が韋州女子小学に入学するまでになった。しかし、途中で学校を退学するいわゆる流失率は高い。ある調査によれば、定着率は76.4%にすぎず、学年が高くなるほど退学者が増えてしまうのが実情である⁽²⁹⁾。さらには、公立小学に入学できるのは計画生育政策で許された2番目の子どもまでである。上記95.5%の入学率に、戸籍登録が許されず、公的サービスを受けないいわゆる「黒孩子」（ヤミっ子）は数えられていないことに留意すべきである。

（4）女子教育不振の原因

同心県では12歳以上の60%以上の女性が非識字、半非識字であるが、それは、教育を受ける機会が女性に特に欠けてきたということの意味する。以下、その理由を三つ挙げておこう。

1. 伝統的家父長制度の影響：伝統的に男尊女卑の考え方が根強く、女性に学問は不要という考え方が僻地のムスリム家庭では特に強い。また、女兒はいずれは他家へ嫁するので、教育に金をかけるのは無駄であるという。それよりは、家で仕事——炊事、子守り、家業への従事——をさせたほうが理に叶うという考え方が根強い⁽³⁰⁾。現に、15歳ぐらいで結婚する娘が多い。ちなみに、結婚は多くの場合、家長（多くが父親）が取り決める。
2. 経済的理由：教育は必要であると考えている親でも、公立の学校では教材費、家が遠方の場合には寮費と食費がかかり、貧困家庭でそれを負担しきれず、小学低学年で女兒は学校に通うのを止めるケースが多々ある。これは、寧夏の貧困地帯では地方財政が慢性的に赤字で、国家財政からの補填を受けざるを得ないが、補填分すら教育に廻せないような状況にあるがゆえに、学校経費が親にのしかかるという悪循環による⁽³¹⁾。
3. 宗教的理由：公立学校は多く男女共学なので、敬虔なムスリム家庭であればあるほど7歳以降は公立学校に入れたがらない。それは、女兒は7歳より蓋頭をかぶるといふ当地のムスリム女性の習慣からも立

証される。また、女教師が少なく、師範教育を受けたものも少なく、また、教え方もムスリムに対して適切でないという問題がある⁽³²⁾。さらには、カリキュラム自体が漢族の伝統的文化価値や倫理観で組み立てられていることも反感を買う一因である⁽³³⁾。ムスリム家庭が娘たちを公立学校にやらないという行為は、均質な公民をつくることを一般的な目標に定めるフォーマル教育に対するひそやかな反抗であるともいえる。彼らが考える均質な公民とは、例えば、思考方法まで漢化すること、消費文化を美德と考えることなどを指す。このことから、できるだけフォーマル教育は最低限におさえようとする力が働くものと思われる。もちろん、地方政府側もそれらの動きに手を拱いているわけではなく、区域自治法に従い、公立の韋州女子小学でもアラビア語、コーランの教育を行っている。しかし、時間数が少なく、小学高学年にはその時間もなくなるので、やはり敬虔なムスリムの家からは敬遠される。

(5) 韋州の郷老とイスラーム共同体——韋州海墳中阿女校の実際

筆者は韋州鎮で3校のイスラーム女子学校（女校）を訪問したが、その一つで、1999年4月に創設された韋州で最新の女校、韋州海墳中阿女校について述べてみよう。一般家屋を修復した校舎に生徒数は、75人前後。全部で、3クラスが開講していた。修了年限は4年であるが、開学したばかりということで1年次の生徒しかいなかった。

校長は60歳代半ばの男性の海長培氏。かつて馬鴻逵が銀川で開いた近代的イスラーム学校、寧夏中阿学校（1934年～1944年）の卒業生である。彼自身は阿訇^{アホン}とはならなかったが、現在、この韋州鎮の郷老、すなわち、宗教活動の中心的人物である。家業は漢方薬の材料となる特産の甘草の栽培と卸の个体戸、息子は日本製のパンを個人で所有して、週に数回は160キロ離れた銀川にまで自ら車を駆って届けるといふ。甘草は日本に送られるという。个体戸としては韋州鎮でも成功している部類である。郷老の海氏はイスラーム復興活動に多忙で、家業にはあまり立ち入っていない。また、この息子の妻楊氏は30歳代後半、内モンゴルのフフホト^{フフホト}出身で、自ら韋州海墳中阿女校の教壇に立つ女阿訇^{アホン}である。この女校の教育の実務は彼女がすべて取りしきっている。

学校経費は、郷老を中心とした委員会が共同体のムスリムから集め、校舎の改修から、女性阿訇^{アホン}を含めた3人の女性教員の給与まで必要経費を賄っている。さらに、地方政府との交渉もまた郷老の役目である。生

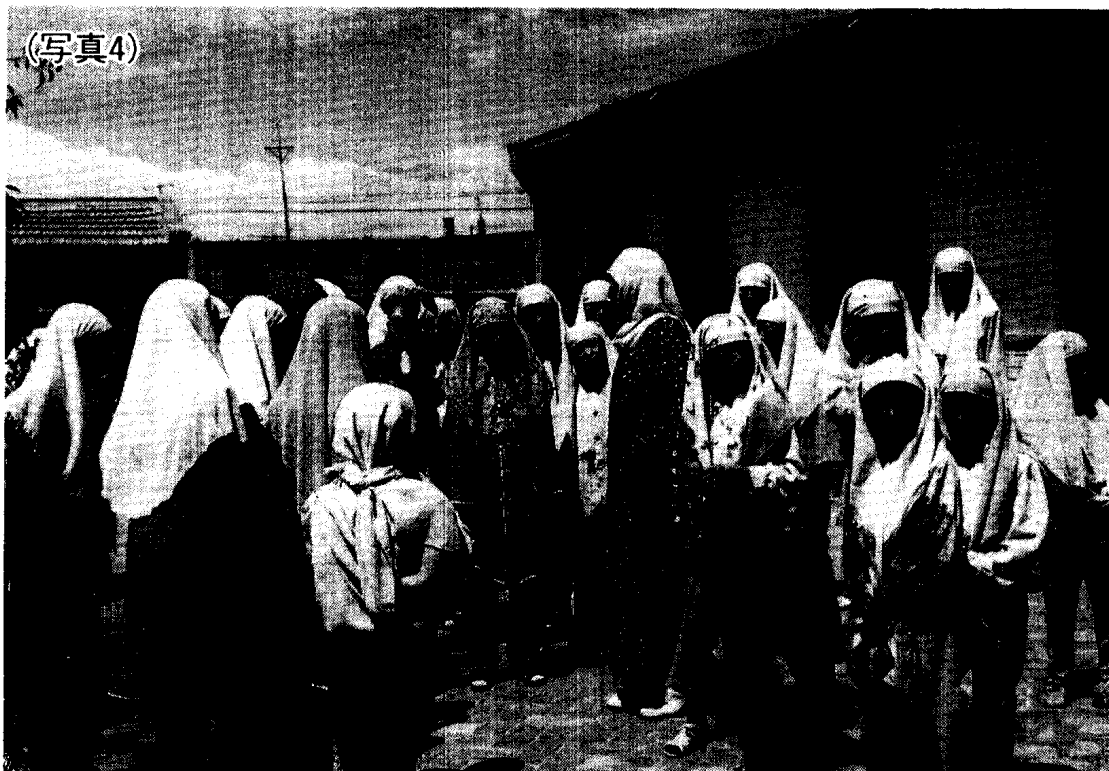
徒は学費無料、盖頭や制服、教材もすべて無料、フフホトの中阿女学でイスラーム教理を学んだ若い女性教師（まだ20歳）2名を雇っている（写真2）。彼女たちの月給は90元（日本円で約1350円）⁽³⁴⁾。いくら貨幣経済がまだ十分に発達していない韋州ですら、最低限の生活水準を守るのがやっとの低賃金である。しかし、完全な無償教育を行い、校舎を改築し、教員に給与を支払うということは、共同体の大きな負担である。女校が韋州において設立され始めたのが、90年代に入ってからで⁽³⁵⁾、これは、改革開放の恩恵が中国辺境にまで及び始めた時期と一致している。郷老の家が裕福な个体戸であり、本人も90年代半ばにメッカ巡礼も済ませたハッジであることから、改革開放の波が地域のイスラーム振興に大きな弾みをつけたことは間違いがない。



生徒たちは、7歳ぐらいから17、8歳ぐらいまでと年齢にばらつきがある(写真3,4)。筆者が訪れた時、大体1クラス25名程度で、3クラス開講していた。また、別の学校（韋州中寺中阿女子学校）では、教育を受ける機会がなかった成人女性対象の成人学級（韋州中阿婦女進修班）も開設されていた。また、成人女性が一定数集まらない場合、若年層にまじって成人女性も一緒に教育を受けるというケースもある。これら女校は通学生徒のみを受け入れている。片道1時間以上もかけて歩いて通う子供もある。韋州は後発地帯に位置するので、生徒の修業は家庭の経済状態によって左右され、学期なかばで学業を断念したり、あるいは1、

2年通っただけでの退学も多い。いくら女校の学費が無料といっても、女兒は貴重な労働力で、農繁期になると農作業に従事することが要求されたり、弟や妹の子守りも期待されたりするからである。

数年公立小学に通っただけで家に戻され、再びこの女校に入学したもの、小学は卒業したもの、全く公立小学に通わなかったものなど、女校



海墳中阿女学は開学したばかりなので、第2学年以上のカリキュラムがまだ決まっていない。例に挙げたのは、同じ海氏が理事をする韋州中寺中阿女子学校の第2学年の時間割である（表1）。早朝からの午前中いっぱいを使って授業を行っていることがわかる。第3学年、第4学年も根本的にこの時間割に従う。が、第3学年になると、6限が礼拝必読に、第4学年になると、土～水曜日4限に信仰篇が入る。イスラームの休日の金曜日が学校の休日となる。

表2：韋州中寺中阿女子学校 第1学年時間割

	土曜日	日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日
5限 (10:00-10:50)	コーラン	コーラン	イスラーム法	イスラーム法	アラビア語	アラビア語
6限 (11:00-11:50)	ハディース	ハディース	講演(宗教講話を聴く)	講演	吟誦(コーラン斉唱)	吟誦

表2は、第1学年の時間割である。午前中約2時間を使って、イスラームの基礎知識を教えることに留意していることがわかる。

(7) 「イスラーム基層女子教育」の目的

「イスラーム基層女子教育」はなぜ必要なのか？ 校長の海長培氏自らが書いた設立趣意書（原文は漢語）をここに引用してみよう。

民族（訳者註……ここでは回族）を振興するためには、まず民族教育を振興させなければならない。とりわけ、女子教育は重要である。良妻賢母が知識を持てば、家を動かし、子孫を教育することもできる。子供が生まれて最初の教師は母であり、一生は揺りかごから始まる。一挙一動から思想・意識まで、絶えず母親の影がつきまとう。一般に、子供と母は父よりも親しい関係にある。子供がまだ知識をえず、物心もつかない頃の話し相手は母で、母の教育を受ける。よって、母親の賢愚が直接子供の成長に影響する。いまムスリム社会では多種多様な迷信崇拝が出てきて、女性に悪影響を及ぼしている。彼女たちは騙されているだけでなく、子供たちをも誤って岐路に引きこんでいる。全国各地のムスリム女性のイスラーム知識が空白であるのにつけ込んで、一部宗教界の腐敗分子が迷信をまき散らし、彼女たちの汚れなき頭にさまざまな汚点を残している。痛ましいことだ。イスラームが中国で振るわず、発展せず、盛んでもない鍵はここにある。多くのイスラーム同胞はこれを心配し、積極的にイスラーム女子学校を創設している。品行学業とも優れ、よい

資質をもった教師を養成し、彼女たちに家庭を指導し、その子女を教育するという歴史的重みを担ってもらう。家庭は社会の基盤であるから、よき家庭がなければ社会そのものになりたない。もし家庭に対するイスラーム教育活動がうまくいかなければ、イスラーム社会は壊れてしまう。よって、女子教育事業の成功と失敗は国家・民族の未来にかかわり、さらに将来のイスラームの盛衰にも影響する。この関係は重要であり、意義も大変大きい。ムスリム一人ひとり、とりわけ阿訇^{アホフ}はこのことを真剣に考えるべきであり、絶対に無視してはいけない。

同心県韋州鎮海墳中阿女校

1999年4月28日⁽³⁶⁾

ここで言及された「多種多様な迷信崇拜」の内容を正確に知ることは難しいが、第一に、新疆ウイグル自治区で広まっているとされる急進的イスラーム原理主義と分離主義、第二に、イスラームが堅く禁止する偶像崇拜・占いなどの「迷信」、第三に、ヘロイン等の薬物販売・吸飲を是認するような教義解釈が存在するであろうことは、各種宗教雑誌などの記事⁽³⁷⁾や、地区人民政府のキャンペーン内容によって窺い知ることができる。ちなみに、韋州の中心街の壁には、「薬物販売・吸飲禁止」の大きなスローガンが書かれていた。

趣意書に表れる「良妻賢母」（原文では賢妻良母）とは、コーランの説く内容を理解し、宗教の本質を見極めた優れた女性のことである。イスラームは「平和」という意味であるが、社会安定の基礎を社会の最低単位である家庭に見出す。従って、地域の共同体の責任者たる阿訇・郷老は、家庭の中心的存在として母親を位置づけ、将来の母親になるべき女性のイスラーム教育こそが安寧な社会建設の鍵を握っていると見なしている。「イスラーム基層女子教育」は、「健全な」イスラーム共同体の再生を試みるイスラーム復興を底辺から目指しているといえる。

筆者は、年齢もまちまちの何人かの女兒に将来の希望を訊いてみた。返ってくる答えは、フォーマル教育を受けている女兒がかなりの確率で答えるであろう看護婦、医師、教師という専門職ではなく、もっと人生の本質を捉えたものであった。「真主（アッラー）の定め給うた道を守り、よい人間になりたい」。

彼女たちは学習を終えたのち、そのほとんどが近隣のムスリム農民に縁づき、農婦として一生暮して行く。そこには職業選択の余地はない。しかし、女校において教師は人間完成を目指すという本来の人間教育の

真髓を伝えようとする。すなわち、女校は社会の基層部分を構成する「よきムスリマ」を育成する場所として機能している。彼女たちは、質素な生活を良しとし、他人と自己に対して正直に誠意をもって生き、すべての存在をアッラーの創造物として肯定するという人間の本来の生き方を目指す。従って、「学ぶことは、揺りかごから墓場に至るまでのムスリム男女の天職」とハディースに表れた言葉は信仰心が篤ければ篤いほど理解される。

一方、一夫婦あたりの子供の数が多いという現実も、女兒に対する特別の教育を後押しする理由の一つである。計画生育政策によって農村の少数民族には2人までの子供が許されているが、貧困は労働力としての多くの子供を求める。実際、一夫婦あたり子供が4～5人というケースもざらである。3人目以下の「黒孩子」は、フォーマル教育や医療保障といった公的なサービスが提供されない。それゆえ、3人目以下の女兒には女校しか教育の場がない。

ちなみに、男児はフォーマル教育を受ける機会が女兒よりも多い。これは、男児だけは、完璧な漢語や社会の動きを学んだほうが経済的に豊かになれると考える親の希望による。これは、イスラームのジェンダー観の中で、男性の方が社会的存在としての面が強調されるという前提があるからである。男児はイスラーム教義を女兒のような半日制のイスラーム学校ではなく、朝や夕方に清真寺で行われる講義（いわゆる経堂教育）を聴講して知るケースが多い。その意味で、将来の結婚生活において、女校で教育を受けた妻のほうが、イスラーム知識において夫を凌駕するという事態も十分に予測しうる。

現在、女校はできたばかりで、また、まだ早婚傾向にあるので、女校修了後、さらに宗教教育を究めるために進学というケースは出てきてはいないが、彼女たちの熱心な学習ぶりからすれば、将来そのような事態は十分に予測しうる。そのような場合に、その機会を提供するのは「イスラーム精鋭女子教育機関」である。すなわち、フォーマル教育の循環の輪から離れ、一旦ノンフォーマル教育を受けた女兒は、イスラーム教育機関の輪のなかを循環し続けるであろうということが予測される。

ただ、ノンフォーマル教育を受けた女性たちは、正確なコーラン理解に基づき、家庭内・社会の中の善悪・正邪を判断できるようになったことで、イスラーム共同体の中では大きな発言力をもつことが予想される。その時に、女子ノンフォーマル教育は女性のエンパワーメントのために大きく貢献するということになる。たとえば、現在、ほとんどの郷老は

男性であるが、将来、女性に道が開かれることも考えられる。

(8) 公的政策との矛盾点

このような利点がある「イスラーム女子基層教育」ではあるが、公的な政策との間にさまざまな矛盾を抱えている。以下、列挙してみよう。

- ①価値観：コーランは奢侈な生活を戒めるが、この価値観は経済発展にわき、消費が美德とされる中国沿海部における倫理とは対極にある。特に、鄧小平がうちだした「先富論」によって東西の貧富の差は縮まるどころか、拡大の傾向にさえある。地域間格差を是正すべく、2000年3月、中央政府から西部大開発の号令が出され、大規模な公共投資が西部に導入されつつある。しかし、もたらされるものが大量生産・大量消費、環境悪化と貧富の差の拡大だとするならば、平等と環境保全を旨とするムスリムの価値との間に大きな齟齬が生じる。また、ムスリムの科学知識の欠如により、新時代の趨勢に大きく乗り遅れる可能性を指摘する声が同じムスリム学者からもでている⁽³⁹⁾。
- ②男女平等観：コーランの教える男女平等観は、漢族が大多数を占める中国が賞揚するジェンダー・フリーの「男女平等」「男女同権」「機会平等」とはその方向を異にしている。すなわち、中国「先進」ムスリムの考え方によれば、イスラームは男女の役割分担の別を定め、女性の家庭における「妻・母」としての役割は「社会」における役割より優先する⁽³⁸⁾。もちろん、女性の社会における活躍を否定するわけではない。たとえば、財産相続の点でも男女に違いがある。コーランには、娘は息子の2分の1しか相続できないことが記されている。これは、相続の男女間平等を定める中華人民共和国の相続法と相反するが、ムスリムはコーランに優位を認める。ムスリム女子が「義務教育法」に従って9年間のフォーマル教育をうけることによって、中国法の説く男女完全平等を唱え、遺産相続権の平等を要求するとする。すると、それは地域のイスラーム法学者のイスラーム法解釈からすれば「イスラームの教義に反し」、彼女は「よきムスリマ」ではないということになる。
- ③国民統合観：「統一された多民族国家」というのが中国の公式の見解であるが、民族問題に関しては、政府は建国以来非常に神経を使ってきた。特に、改革開放以降、沿海部に多く住む多数民族の漢族と、内陸部の少数民族間の経済格差が拡大し、あらたな民族紛争の潜在的火種となっている。多く少数民族のアイデンティティの中心である宗教

は政府が教義の内容を厳しく検閲する。その結果、たとえば、1999年に法輪功が「邪教」として弾圧されたのは記憶に新しい。政府が宗教に要求する必要最低条件の「愛国主義」と「共産党の指導」はイスラーム界も了承し、各清真寺にそれを遵守させている。しかし、ノンフォーマル教育が今後普及し、政府がその拡大を放任しつづけるならば、明らかにフォーマル教育を受けた人間との間で世界認識に差が生ずる。また、民国時代に「先進」ムスリムによって形作られた、統一国家の中の少数民族「回族」アイデンティティも、沿海部のすでに礼拝を忘れた回族と内陸部の宗教熱心な回族では異なってくることも予想される。すなわち、同じ「回族」内でエスニック・アイデンティティの濃淡が異なってくる可能性もある。

- ④人口抑制策との矛盾：現行の中国の人口抑制策は、少数民族にすら一夫婦あたり2人の子供の出産しか認めず、違反者には罰則もある。しかし、労働力が必要な貧困地帯では多産傾向にある。3人目以降の「黒孩子」の存在は政府の悩みの種であるが、政府はそれらの子供には公共サービスを提供せず、子供たちの存在は黙殺されているといっても過言でない。しかし、現実にもそのような子供が存在し、教育も施されないとするれば、将来大きな社会不安に繋がる可能性は十分にある。地域のイスラーム共同体は「イスラーム基層教育機関」を設置し、彼らを積極的に受け入れている。すなわち、フォーマル・セクターで解決できない教育問題をノンフォーマル・セクターによって補完し、「黒孩子」の疎外を解消しているとも評価される。

結語：社会の「安定団結」のために

上記のような矛盾点から、「イスラーム基層社会は外界と隔絶した排他的イスラーム共同体化し、漢族社会と乖離していくのではないか」とか、「コーランに照らし合わせて、中国政府の公式見解との矛盾に疑問をもつものが出て、『党による指導』原理が危機に瀕するのでは」とか、「政府の国民統合政策は大きな岐路に立たされ、中国は分裂の危機に」とか、ハンティントンばりに「やはりイスラームと儒教は異文明で共存できない」などという疑問を呈するものもあるであろう。しかし、答えは否である。

それはまず、この20年間のイスラーム復興運動の性格そのものが、民国期の中国イスラーム新文化運動の流れを濃厚に継承しているからである。帝国主義勢力の圧迫の下で救国救亡思想が広がる中、その運動は急

成長した。漢人をはじめとした他エスニック集団と共同して確固たる主権国家中国を建設することこそがイスラーム復興の柱である、そのためには正確なイスラーム知識を培い、西欧近代主義思想の「よき」点と漢語の知識を得、中国内で共存共栄の努力を行わなければならない、まず愛国者たれと主張した「先進」^{アホソ}阿訇や知識人の運動は、まず教育に力を注いだ。民国時代のムスリム知識人たちが設立した中阿学校の卒業生たちは現在60歳台から70歳台である。彼らは故郷に帰り、冬の時代を生きぬき、改革開放を期に地域共同体の責任者、イスラーム復興の責任者として郷老となっている。彼らが従来の盲点であったイスラーム女子教育の重要性にいち早く気づき、社会改革すべく立ち上がったことが今日、雨後の筍のように増加している女校におけるイスラーム女子教育の隆盛につながっている。中阿二言語を識字した彼ら郷老こそが漢族社会とムスリム社会の橋渡し役であり、なおかつ、中国に広範に散らばったムスリム社会同士をネットワーク状につなぐ仲介者である。たとえば、本論で取り上げた「イスラーム精鋭女子学校」から地方の「イスラーム基層女子学校」に対する卒業生派遣事業や、それら学校で用いる教材の流布といったことなどは彼らの広範なネットワークに拠っている。そのネットワークは郷老が学生時代に作ったものもあれば、農閑期に行う行商によっても構築されてきた。

「イスラーム基層女子教育」というノンフォーマル教育は、フォーマル教育に欠如している点を補い、^{ウツマ}共同体の人員の熱い要求をかなえている。その意味では、80年代以降のイスラーム復興は中国ムスリム女性にとっては歴史上未曾有の革新的出来事であったといえる。

一方、現政権の権力機構の中に「党幹部」として参加した郷老やその息子もいる。中国共産党はさまざまな階層、エスニシティ、ジェンダーを包含する有機体的組織構造をもっているが、彼らは、自らのイスラーム復興の意味を中国共産党に理解させる役割を担っている。その意味では、彼らの「和平演変」をめざす働きにより、将来的に「イスラーム基層女子学校」が何らかのフォーマルな補助の対象になることも充分考えられる。

さらには、中国のイスラームが唐代以来千年以上にもわたって中国社会の中で共存してきた事実は重い。明代に重臣となった海瑞、大航海で有名な鄭和、思想家李卓吾、彼らは漢人社会の中で儒教的知識を受容しつつもイスラームを護りつづけたムスリムであった。明末清初の王岱輿、劉智などいわゆる回儒たちは、イスラームを儒学の概念で説明し、それ

によってイスラームの純粋性を保持しようとした。ジャフリーヤ派を例外として、歴史的に反体制理論となりうる神学解釈は存在しなかった。彼らは圧倒的多数を漢族が占める社会の中で少数者として生きぬき、イスラームを守り、発展させることを運命づけられてきた。歴史的に培われてきた彼らの智慧、これこそが異文化共存の智慧である。

中国共産党政権は改革開放政策の堅持によって中国の経済発展のイニシアチブを取ってきた。さらには2000年に発動された西部大開発の号令のもと、西北地域の再開発にも着手している。「安定団結」、「民族団結」のスローガンはなにも漢族幹部が一方向的にプロパガンダを行っているわけではなく、団結したほうがみんなの利益になると考えているエスニック幹部やその周辺にいる実力者、たとえば郷老の考え方も代弁している。すなわち、イスラーム復興はフォーマルな側面とノンフォーマルな側面を兼備しながらこれからも漢族社会とともに「よりよき方向」へ向かっていくであろう。これを「イスラームと儒教の対話」と呼ぶ研究者もいる⁽⁴⁰⁾。歴史的に常に対話はされてきた。中国は漢族だけの社会でなく、中国文明は多彩な文化の複合した結果出来上がったものだと主張し、「中華民族は多元で一体の構造をもっている」という今日の公式な中華民族論の基を作ったのは、民国時代のイスラーム新文化運動の指導者たちであった。

90年代の世界的民族紛争の時代、世界一の人口を抱え、世界第4位の領域面積を持つ多民族国家中国において民族紛争は顕在化しなかった。それは急速な経済発展という側面も見逃せないであろうが、しかし歴史的に合意事項として了解されてきた多エスニック集団の共存をよしとする思想的・社会的背景がその一因であることは論をまたない。本論の筋立てに沿って言えば、社会の安定団結にはフォーマル・セクターを通過してもノンフォーマル・セクターを通過しても到達できるということであろう。

本論は平成11年度～14年度文部省科学研究補助金 基盤研究 (C) (2) 課題番号11610382「近現代中国の国民統合原理と中国イスラーム改革派の政治的諸関係についての歴史学的研究」(研究代表者:松本ますみ)の成果の一部である。

註

- (1) 「北京宣言および行動綱領実施のための更なる行動とイニシアティブ (いわゆる「成果文書」)」総理府男女共同参画室ホームページ、総理府仮訳 <http://www.sorifu.go.jp/danjo/>
- (2) Jaschokもこの二つのカテゴリーの女校 (その著作では一括して「女学」と呼んでいる) の存在に注目している。Jaschok, Maria and Shui Jingjun, *The History of Women's Mosques in Chinese Islam—A mosque of their own*. London: Curzon, 2000, pp.106-107.
- (3) マッケラスの次の論文にはごく短いイスラーム女子学校の紹介が出ているが、詳しい論述はされていない。Mackerras, Colin. "Han-Muslim and Intra-Muslim Social Relations in Northwestern China," In William Sufran, ed., *Nationalism and Ethnoregional Identities in China*. London: Frank Cass, 1998, pp.40-41.
- (4) 臨夏回族自治州志編纂委員会編『臨夏回族自治州志』甘肅人民出版社、1993、p.89, p.1303。
- (5) 馬占奎「臨夏市八坊清真寺簡介」中国人民協商会會議臨夏回族自治州委員会文史資料委員会編『臨夏文史資料』第6輯、1990。
- (6) 中国人民協商会會議臨夏回族自治州委員会文史資料委員会編『臨夏文史資料』第7輯 1992 の工商經濟部門資料参照のこと。また、馬占奎、丁化「臨夏回族商業的發展歴史及特点」『回族研究』1994年第2期も参照。
- (7) 中国社会科学院民族研究所編『中国少数民族現状与發展調査研究叢書 同心県回族卷』北京：民族出版社、1999、p.196。
- (8) 内モンゴルフホトの中阿女校、寧夏同心県同心鎮の同心アラ伯語専修学校の女校も知られている。後者は、アラブ地域からの献金も受け、1985年に設置された。今までに803名の卒業生を輩出し、その半数が教師となっている (李宗道 王克林「同心県的回族教育」『回族研究』2000年3期)。
- (9) 馬克利「河州走向中東—臨夏中阿学校采訪紀実」『甘肅日報』1992年11月21日。
- (10) 臨夏中阿女校校長馬秀蘭氏談 (2000年9月)。彼女は1980年入学組で、臨夏中阿業余学習班の最初の生徒の一人である。
- (11) サウジアラビアには臨夏市出身者が200戸以上、2000名以上住んでいるという (馬克利op.cit.)。民国時代にメッカ巡礼をし、そのままアラビアに留まったものの子孫であると考えられる。また、サウジアラビア在住の眷属については「一所別致的学校——臨夏中阿学校紹介」臨夏回族自治州教育局編『臨夏教育情況』第8期、1989年7月にも記述がある。中国各地のイスラーム経学院に対する世界イスラーム銀行からの融資については比較的よく知られているが、在外「回僑」からの献金とそのネットワークを生かした中国とサウジアラビア間の経済関係については全く研究がされていない。今後の課題であろう。

- (12) 「甘肅臨夏中阿女校の現状」『穆斯林婦女』第45期、2000年5月1日。
- (13) 馬秀蘭「甘肅省臨夏中阿女校工作彙報」(1999年6月29日)(馬秀蘭校長提供資料)。
- (14) 「甘肅省臨夏中阿女校99学年度招生啓事」『穆斯林婦女』35期、1999年6月1日。
- (15) 一方、1995-1996年のアンケート調査によれば、この時期、臨夏中阿女校の約22%の生徒の家庭が経済的困難を抱えており、生徒は儉約生活を余儀なくされていたという(羅彦蓮「西北回族女童教育之思考」『西北史地』1999年第4期)。
- (16) 「臨夏中阿学校四年制教学大綱」(馬秀蘭校長提供資料)。
- (17) 「中阿学校卒業生総表」(馬秀蘭校長提供資料)。
- (18) 李仁「寧夏回族女童教育的成就、問題及对策」西安市伊斯蘭文化研究会編『伊斯蘭文化研究』寧夏人民出版社、1998、p.207。
- (19) 同心県志編纂委員会編『同心県志』巻一、地理志、p.95。
- (20) 中国社会科学院民族研究所編 op.cit., p.12, p.15, p.20。
- (21) 余振貴『中国回族之最』寧夏人民出版社、1998、p.11。
- (22) 何兆国『寧夏清真寺概況』銀川：寧夏少数民族古籍出版弁公室、1992。
- (23) 例えば、Gladney, Dru. *Muslim Chinese*. Cambridge: Harvard University Press, 1991.
- (24) 楊志銀「關於“天課”在社会經濟活動中的作用度的調查研究」『世界宗教研究』2000年第1期。
- (25) Matsumoto, Masumi. “Rationalizing Patriotism among Muslim Chinese”, Kosugi, Yasushi, ed., *Al-Manar, the Lighthouse of Islam*. London: Kegan Paul International, Forthcoming.
- (26) 拙稿「中国イスラーム新文化運動とナショナル・アイデンティティ」西村成雄編『現代中国の構造変動3—ナショナリズム』東京大学出版会、2000。
- (27) 中国社会科学院民族研究所編 op.cit., pp.282-283.
- (28) 馬鴻逵『十年来寧夏省政述要』第四冊、教育篇初等教育(復刻版、寧夏少数民族古籍整理出版規画小組辯公室編、寧夏人民出版社、1987年、p.128)。
- (29) 中国社会科学院民族研究所編 op.cit., p.278。
- (30) 丁国勇「西北地区回族女子教育概況」『回族研究』1996年第3期。
- (31) 陳曉虎「寧夏南部山区回族教育現状分析」『回族研究』1996年第3期。
- (32) 李仁op.cit., p.207。
- (33) 馬明良「西北伊斯蘭教育」『甘肅民族研究』1995年第2期。
- (34) この金額はまだましな方で、寧夏海固県の西にある女校教師の月給は50元以下という。(「女童教育与西部的未来」『穆斯林婦女』2000年5月1日)。ちなみに、寧夏大学講師の某氏(32歳)の月給は800元であるという(2000年現在)。
- (35) これについては、Cherif, Leila, “Ningxia, ‘l’école au féminin’”, *Etudes Orientales*, Nos. 13/14, 1994に簡単な紹介がある。
- (36) 「伊斯蘭和女子教育」海長培校長提供資料。

- (37) 艾尤布・葉紹繁「伊斯蘭教嚴禁販毒与吸毒」『求知』西安市大皮院清真寺伊斯蘭教学校、1998年3期。中国社会科学院民族研究所編 op.cit., pp.298-307。
- (38) この点に関しては、西側のジェンダー論の論者からは異議が唱えられるであろう。北京会議において西欧側とイスラーム諸国側が対立した論点の一つである。西欧側の観点に立って、Mackerrasは「女性が男性に服従しているイスラーム社会」という観点を堅持しているようである。(Mackerras, op.cit)
- (39) 馬明良「回族経堂教育之得失及其出路」『回族研究』1998年第4期。
- (40) Gladney, Dru, “Muslim and Chinese Identities in the PRC”. In Gladney, Dru ed., *Making Majorities—Constituting the Nation in Japan, Korea, China, Malaysia, Fiji, Turkey, and the United States*. Stanford: Stanford University Press 2000, p.129.